



海 ↓  
白髭神社 ↓

長与町ペーロン資料館 (2000×2000 高さ900cm)  
(1986年4月落成)



この川よりペーロン舟を海へ  
→  
←





写真 ①

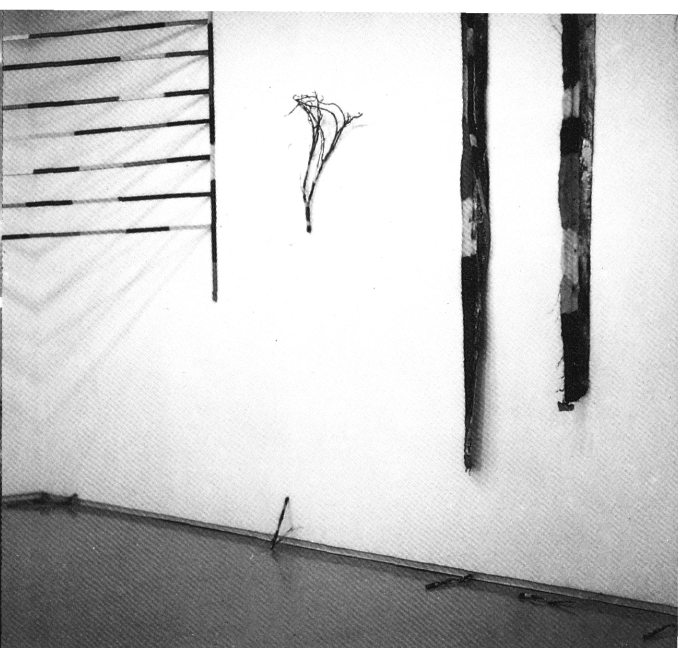


写真 ②

## ◇カラー図版（前ページ）= Peinture（絵画） 1

長与町ペーロン資料館

外壁面：約1,000㎡

制作者：井川 惺亮

場 所：長崎県長与町ふれあい広場

外壁面制作、約1,000㎡を、自らが直筆として描き切ること。その中にあって、絵画としての新しいリズム、新しい秩序を保持する意志力を続けること。その結果が単なるデザインとしての装飾で終わらず、あくまでも、絵画作品そのものとして実現することなどが今回の課題であった。それ自体で、絵画としての自立性を持ちながら、同時に、その状況に対しては、それを取り巻く周辺の環境との関係に、ハーモニーやバランスを与えつつ、時に反発する緊張感を含めた絵面空間を展開するように努めた。

制作意義としては次のことがあげられる。

- 公共の場を直接制作することによって、芸術家の本来的な役割を担い、そこにアートそのものが存在することで、現代の人々とアートを結びつけるコミュニケーションの場を得ることになった。
  - この種の外壁面制作は、普通、大都会で実現されるように思われるが、日本の最西端、長崎県長与で実現出来たこと。
- 尚、美術手帖7月号 '86 美術出版社「井川惺亮が描いたペーロン資料館」、町並み景観診断書調査報告書（片寄俊秀著他）—長与町・時津町—1986・3 長崎県等を合わせてご覧下さい。

## ◇白黒図版（本ページ）= Peinture（絵画） 2

展覧会：個展

会 場：真和画廊（東京・銀座）

企画・主催：真和画廊

会 期：1986年4月7日～12日

発 表 者：井川 惺亮

長崎では、窓から外景が見える展示空間での作品発表が幾度かあった。（註1） こうした体験をもって、久しぶりに上京しての作品発表は、ビルの谷間というコンクリートの重圧がひしひしと感じられた。このような感情に自作をどのように対応させていくか、（写真①） それと同時に、本来絵画が持つ問との振幅を繰り返すこととなった。（写真①、②、特に②）

今回の発表では、アートと社会性ということも提示した。この社会性とは、例えば、クロード・ヴィアラ（註2）が扱う素材は、その選択により、歴史観をも包含する社会性を持っているが、私の場合、美術教育の中で、学生たちが残した廃材のうち、捨てられたナイフやキャンパスなどは新しくアートそのものを問い直すことが出来る社会性を提示した。これらの中で、ペインティングされたナイフの出版（写真②）は今後展開できる可能性のある作品として、意義あるものとなった。（註3）

（註1） 1984・11 B倉庫（個展）この倉庫は長崎港沿岸にあって、その波間が常に見える。

1985・10 長崎総合科学大学（個展）網場や橘湾が見渡せる。 その他、この文章を書いている時点でも、

1986・10 活水女子短期大学（個展）長崎港・湾の天望が出来る等がある。

何れも、外界の風景を展示空間の中にまで取り込むことによって、絵画としてのあり方を新しく問うてみた。

（註2） Claude VIALLAT 1936年フランス・ニーム生れ60年代後半よりシュール・ポール／シュール・ファーススを提唱し、1981年にはボンビド芸術文化センターで個展開催、フランス現代美術の第一線で活躍中、現在ニーム美術学校学長。

（註3） 絵とおしゃべり 8月号 '86 山下画廊発行 ペインティングされたナイフの拙文を参照。